福島県西会津町奥川地区
奥川中町集落
フィールドワーク報告書

令和元年度大学生の力を活用した集落復興支援事業（実証実験）

２０２０年２月２９日

福島大学行政政策学類

岩崎ゼミナール

１．活動の目的

少子高齢化による人口減少の影響を受け、過疎地域にある集落では高齢化、若者の都市部への流出が一層深刻化している。

そんな少子高齢化と人口減少の著しい地区に大学生が入ることによってその町にどのような影響があるのか、地域の活性化のためにどんな活動ができるのか、集落がより良い方向に進むにはどうしたらいいのかを調査するために、今回ご協力していただいたのは福島県西会津町奥川地区である。

西会津町奥川地区は高齢化、後継者不足による農業の維持問題、空き家の問題など多くの問題を抱えている。私たち大学生は、実際にこの地域に入り、地域の方々に話を聞き、地域の方々と活動を行い、この地域を活性化させる取り組みは何なのかを考えるために、フィールドワークを行った。

２．活動スケジュール

昨年度の基礎調査をふまえ、今年度の実証実験では以下の活動を実施した。

活動日	活動内容
４月２８日・２９日	西会津町春の人足ツアー
６月１日・２日	七観音ウォーク
７月２０日・２１日	奥川夏の人足ツアー
８月１４日	奥川盆踊り
８月１８日	極入大聖歓喜天祭礼
９月１３日～１５日	出戸岩屋祭り・一日孫体験・敬老会
１１月３日・４日	奥川新そば祭り・杉山集落活性化事業
１１月３０日・１２月１日	西会津町奥川秋の人足ツアー

３．具体的な活動内容

４月２８日・２９日　春の人足体験ツアー

２０１９年度西会津町での初めての活動となったのは、春の人足体験であった。今回は、会津大学生と一緒に参加したため、去年の梨平地区、中町地区に加えて、向原地区にも活動を広げることができた。参加した学生からは、「会津大学の学生（日本人１人を除き、そのほか外国人）との交流があり、新鮮だった。」や「地域の年配の女性の方とお話しする機会があったが、集落が発展するにはどうすればよいかについて深く考えている印象を受けた。」などの感想が挙げられた。

６月１日・２日　七観音ウォーク

岩崎ゼミでは去年に引き続き参加させていただいた。女性３人、男性１３人の

計１６人が参加し、奥川にある７つの観音堂を計１５キロメートル歩いて回った。参加者は、５０代６０代が多かった。中には、会津三十三観音めぐりが終わったということで参加した人や、前回、奥川を訪れた際に、七観音ウォークを教えてもらえたため、初めて参加した人などもいた。途中のお昼ご飯は、七観音の一つが祀られている地区の方が、漬物と山菜汁を用意して待っていてくれた。また、参加後は、記念の御朱印と、集落支援員の岩橋義平さんが作ってくださった甘酒をごちそうになった。

７月２０日・２１日　奥川夏の人足体験

春の人足に続いて夏の人足にも参加させていただいた。夏は、中町集落のみでの実施だった。地区の男性は用水路付近の草を草刈機で刈り、女性と学生は、刈った草を鎌やフォークを使って用水路の外に出す作業をした。四キロメートルにもわたる道のりを歩きながら作業した。久しぶりの晴天だったが、湿度が高く、汗を多くかきながらの作業になった。参加した学生からは、「二回目の人足だったので、住民の方に顔を覚えてもらっていて、声をかけてくださったことが非常

に嬉しかった。」との感想があった。また、岩橋義平さんからも「次の秋の人足ももちろんだし、就職しても同僚連れて人足来いよ！」と言っていただいた。このように自分達をあたたかく迎え入れてくれる住民の方々の姿勢は、関係人口を拡大させるための大きな可能性を抱いていると思った。

８月１４日　奥川盆踊り

奥川地区の青年団的存在である、高陽塾の皆さんが復活させた盆踊り大会の設営・運営の手伝いをさせていただいた。盆踊り大会舞台の準備とビアガーデンの販売物の準備を手伝った。盆の時期であるため、帰省している方など多くの方が集まった。参加した学生からは「集落内に住んでいる地元住民と外から来る人との交流は、地域の活性化と人間関係を築くのにとても重要だと感じた」等の感

想が挙がった。

８月１８日　極入大聖歓喜天祭礼

極入の大聖歓喜天祭に参加し、設営および山道の案内役と岩魚を焼く係に分かれて手伝った。岩魚を食べることが初めての学生もおり、「頭から食べるのがおいしい」などとアドバイスをもらったり、蕎麦や甘酒などの差し入れもいただいたりした。参拝に訪れた人は想像以上に多かった。また、参拝に訪れた人同士、主催者の集落住民と参拝者が顔見知りであるケースも多く、地域の人のつながりを見て取ることができた。

９月１３日出戸岩屋祭り

出戸地区で毎年開かれている出戸岩屋祭りに参加した。山道に入ると杉並木がとてもきれいだった。途中地元の住民が自ら作成したという丸太橋が 2 つあった。目的地の岩屋虚空蔵尊のあるお堂までは急勾配の 105 段もある石段を登り、お堂の中では囲炉裏を囲んで参拝者と住民の方が懇談をしていた。中ではお神酒をいただき、おみくじをすることができた。下山してからは、豆腐汁と山菜をいただくとともに、他の下山した方々に配膳の手伝いをした。

9月１４日　１日孫体験

学生が奥川中町集落の方のご自宅に訪問し、聞き書きを行った。自宅で世間話をするようにお話しすることでさらに親睦を深めることができた。1 日孫体験では、部屋の掃除や洗濯の手伝いを行った。聞き書きでは、自らの人生の歴史や、地域の暮らし、仕事の変化についてお話しいただいた。屋号と印、家紋とそれぞれの家を示すものが 3 つもあるということに驚き、それぞれ読み方が違うということを教えていただき、今まで混同していたため新たな気づきであった。同じ苗字が多いが故の地域独自の屋号文化であり、地域を表す特徴として注目していきたいと感じた。

９月１５日　敬老会

西会津町奥川地区が主催する敬老会の運営の手伝いをした。招待客は計 105 人であった。各集落まで車で迎えに行き、敬老会後も送り届けるサービスがあったため、参加率が高かった。また、靴の履き替えを手伝ったり、荷物を持ってあげたりなど、招待客である高齢者がしてほしいことに気付けるよう、常に周りを見ることが求められ、学生みんなで声をかけながら参加したことが印象的であった。

舞台では、住民による楽しい出し物がいくつもあった。学生も、じゃんけん大会とマジックを披露した。参加者にも楽しんでいただき、学生の存在を昨年以上に知ってもらうことができた。

１１月３日　奥川新そば祭り

去年に引き続き参加させていただいた。お食事処の設営、待合室の設営から、受付係、配膳係、駐車場係、追加で頼めるてんぷらの調理の手伝いなど係に分かれることで、各自、住民の方から支持をいただきながら、行動することができた。待っている人が退屈しないように、住民の片岡元次さんがお花やどんぐり等の木の実、奥川の写真等を飾ったり、婦人会の方が、野菜やいももち、ジュース、西会津町の加工品等を販売したりなど、魅力を発信する工夫が見られた。

１１月４日　杉山集落活性化事業

「上様御小休所」という石碑を観光資源にしたいという住民の発案で、石碑までの小道の整備をお手伝いした。地域の方が草や木を刈って、それを学生が邪魔にならない場所にまで移動させた。石碑から歩いてすぐのところが新潟県との県境であり、福島県と新潟県を行き来することができた。作業自体は２時間くらいで終了したが人足よりも長く歩いたように感じた。

１１月３０日・１２月１日　西会津町奥川秋の人足ツアー

春の人足同様、会津大学生と一緒に参加した。30 日には、日本の文化体験があり、留学生が楽しんでいた。また、30 日の夜ご飯を作るために地元の方が 2 人協力してくださり、料理を教えてくださったことで地域の方との交流もできた。また、宗教・文化への配慮として、食べられないものを事前に聞くという工夫があった。

1 日の人足は、中町集落と梨平集落に分かれた。福大生と会津大生は混合で分かれた。秋ではあるが、朝の奥川はとても寒く、日陰では雪を見ることができた。スコップの扱いに慣れていない留学生に対して、地域の方が体を使って教えているのが印象的であった。

人足後の慰労会では、留学生に対して地域の方が興味津々で質問しており、留学生にとっても地域の方にとってもとてもいい刺激のある交流だと感じた。

４．１日孫体験の聞き書きのまとめ

ここでは､9月14日に行った1日孫体験で行った聞き書きについてまとめる。孫体験は計10軒のお宅にお邪魔させていただいた。その中から、2軒の聞き取り結果を抜粋して紹介する。

1軒目

〈子供の頃の思い出〉

〇子どもの頃の遊びについて

山遊びが多く、忍者ごっこ、葉っぱで小屋を作ったりしていた。川でも遊び、箱眼鏡を使って、魚を捕まえたりしていた。年上の人から遊び方を学び、上の子は必ず下の子の面倒を見ないといけないという教えがある時代だった。村全体が自分の子供のようにして、どこの子どもにも、自分の子供のように接していたため、隣のお父さんに怒られたという記憶がある。

〇子供のころの手伝いや食べ物について

農繁休暇というものがあり、春の田植えが忙しい時期とか、秋の稲刈りの時期とか、2･3日学校が休みになり、家の手伝いをしなさいというものが存在した。ほかの地域でも見られた。どこの子どもでも、何かしら家の手伝いはしていた。風呂の水くみが嫌な手伝いで、どうさぼるかいつも考えていた。どの時代も子供は手伝いをさぼりたいと考えるのは同じようだ。

誕生日には祝う文化はなかったが、ライスカレー、今でいうカレーライスを食べた。そのほかに、焼き飯、今でいうチャーハンも食べた。どちらもごちそうであった。普段は、ご飯と野菜だった。季節のものを食べていた。また、新鮮な魚はないため、塩漬けされた魚を食べていた。味噌、醤油も自分の家で作るのが当たり前であった。

〇子供のころの中町集落の様子（初めて来た頃の地域の様子）

子供のころの中町集落の印象は子供がいたから賑やかだった。三世帯家族が当たり前であり、家族数は平均8人くらいだった。佐々木やかべや、かどという

屋号の駄菓子屋があったり、タバコ屋、酒屋、床屋などもあり、奥川の商店街のような感じだった。

〇子供のころの農業・林業生産、その他の生業（仕事）の様子

農業と林業で収入を得ていた。農業は農協に出し、林業は個人で買いに来た人に売っていた。周りは全部桐畑であった。当時は、杉も売れたし、桐が一本 100 万で売れたが、売るまでに年月がかかるため、先祖が植えたものを今の代で切る、その後植えたものを孫の代で切るという風にうまく回転していた。養蚕や豚、牛、鶏、羊も育てており、売ったり、食べたりしていた。

〈地域の暮らしの変化について〉

〇仕事の変化について

昭和 40 年代になって誘致企業が来て、現金収入ができるようになってから変わった。奥川地区の方が、町場で生活している人よりも生活レベルが高かったように感じるほど経済成長を感じた。例えば、テレビが各家庭に一つではなく、各部屋に一つあるほどに変わった。

〇人足作業の変化、今はもうない年中行事やお祭りなどの思い出

人足は人足に出る人がいなくなってきた。若者は外に出ていくし、年寄りばかりが残っていくことで、維持が大変である。しかし、中町は、人足ツアーのように外からボランティアを呼び受け入れることで非常に助かっている。また、若い人と交流することが刺激となり村の人も喜んでいる。

以前は、お盆の帰省客相手にソフトボール大会があった。しかし、帰ってくる人も少なくなり、高速道路が混むのが嫌な人などもおり、帰省が分散することで集まらなくなってしまった。集落ごとに全盛期だと 20 チームぐらい出ていた。だから 1 か所では収まらないほどにぎわっていた。

百万遍や豆拾いもやっていた。

〈現在～過去〉

〇現在の仕事、生きがい、趣味や楽しみ

知らない人としゃべること、交流を持つことが生きがいであり、趣味であり、

楽しみである。

2 軒目

〈子供の頃の思い出〉
〇子供のころの遊びについて
　ビー玉や、パッタ（メンコ）で遊んでいた。また、小学生の頃はじんしょとり（おそらく、陣地取り）をして遊んだ。ドジョウとり、馬飛びなど外で遊ぶことが多かった。

〇子供のころの手伝いや食べ物について
　自分で食べる分だけの野菜を作っていたから、それの手伝いはした。あとは、水汲みがあり、毎日夕方に一升瓶ややかんをもって近くの山の麓まで汲みに行っていた。その後井戸ができて、水道ができた。嫌々というよりは、周りの家も子供がしていたからみんなで集まって一緒に行っていた。
　子供のころのごちそうは肉だった。

〇子供のころの中町集落の様子（初めて来た頃の地域の様子）
　今ほど便利ではないから、暮らしやすくはなかった。

〇子供のころの農業・林業生産、その他の生業（仕事）の様子
　祖母が畑をやっていた。林はあったが、人に頼んで手入れしてもらっていた。桐よりも杉の多い林であった。

〈地域の暮らし等の変化について〉
〇仕事の変化について
　町の仕事をしていたため、冬は泊まって仕事をしていた。野沢に冬の間は 6 年間住んでいた。その後除雪されるようになり、バスが通るようになった。自家用車で仕事仲間の何人かを乗せることもあった。休日だけ、農業はやっていた。みんな手で脱穀をしなければならないときや、稲をかけるのにも人が必要で、昼間いないから、夜帰ってきてから、耕運機のライトをつけて照らしながらやった

りもした。

〇人足作業の変化、今はもうない年中行事やお祭りなどの思い出

この村は人足に出るときの出不足が男も女も平等だから助かる。昔は、男なら100だが女だと80のように差をつけられていた。それがなくなって助かっている。

秋の体育祭に参加するチーム数が、21自治区中6つくらいに減ってしまったことが悲しい。競技自体も一日かけてやっていたことが、半日になったりしている。

今はやっていないけど学校行事のイナゴ採りが得意で、小学校から中学校まで全校1位だった。採ったイナゴは学校で集めて大鍋で茹でて売っていた。そのほかにもドクダミや杉っぱ拾いも学校行事であった。

〈現在～過去〉

〇現在の仕事、生きがい、趣味や楽しみ

ミネラル野菜作りが仕事である。自分たちが食べる分や子供たちに送る分を作っている。

麻雀やパチンコも趣味。健康麻雀でクラブを作っている。今16人はいるが、出て3卓だからできるのは12人、大体は8人くらい来て交流館にて月1回活動している。冬は野沢に泊まっていたから、負けるとそばを奢れなどといわれていた。

俳句会に入っている。野沢で月1回、まんさくという句会に入っている。17・8人は入っている。

孫とも夏休みの盆の年1回くらいしか会えない。昔は、釣り堀などに連れて行っていたが、今は高校生になったから来ても家でゲームしている。宮古のそば屋に連れていくくらいしかしない。

〇最近あったうれしいこと・楽しかったこと、困っていること

猿に野菜を食べられて困っている。南瓜は全部食べられてしまう。猿から野菜を守ることに疲れてしまう。電柵もやっているが、それを飛び越えたり、電柱を登ったりするので意味がない。畑で仕事をしていると、隣まで猿が来て見ている。変に声をかけたりするとかかってくるから、構わないでおくようにしている。熊

はいるが出会ったことはない。今年から猪が増えている。去年、猟友会の人が 10 匹くらいいっぺんに獲った。

雪囲いするのも、毎年 1 メートルから 2 メートルくらい降るから大変である。

松茸が 20 本くらい獲れたことがうれしかったことである。子供と親戚に送った。

聞き書きをしてみての考察

聞き書きをする中では、学生の質問に対して詰まってしまうことが少ないように感じた。学生から助け船を出して、絞り出すという場面がなかった。子供のころの話をする中で、少し楽しそうだったのが印象的であった。懐かしい思い出を話すことで、楽しい気持ちになれたのではないだろうか。

話を聞いていた学生も、話を聞く中で、自分の地域との違いや、自分の子供のころとの違いに気づくこともあり、より一層、中町集落の知識を深めることができたとともに、自分に関連付けることができたと感じた。知らない単語や、自分の地域との違いを地域の方に聞いたりすることで、会話が弾んだ。

質問事項は決まっていたが、脱線したところを無理やり軌道修正せず、脱線したところにこそ、話が弾んだところにこそ思い出があり、それを残しておくことが、地域の特色になるため、今回の聞き書きの中では、その点に関して成功したといえるだろう。そして、地域の方にも、当時を思い出すきっかけを提供できたと感じた。

５．今年度の振り返りと来年度への展望

①一日孫体験

昔の集落の暮らしや仕事の変化について、住民自身の語りを通して知ることができたのは大きな成果だった。昨年度からの活動を通して、住民の方と学生との関係も深まり、人足に参加するなどのおかげで地域の方との共通の話題ができたことも、聞き書きの際に役になったと感じた。

地域の歴史や屋号を調べている区長の岩橋さんの活動に学びながら、現在は行われていない行事を学生参加で復活させたり、個人史の冊子を作るなど、地域の歴史や経験を次世代につなぐ活動を行っていきたい。

②人足体験ツアー

今年度はツアーの参加者が増えたことで、ほかの集落にもボランティアが参加することができた。会津大生とともに参加することで、福大生の刺激になるだけでなく、地域の方の刺激にもつながった。また、会津大生と地域の方の橋渡し役として我々が行動する場面も実際に存在し、これまで参加した経験や聞いた経験が役に立ったと感じた。これからも、橋渡し役になれるよう、情報を共有することが大切だと感じた。

来年度は完成した活動拠点を活かし、ゼミ外の学生や他大学の学生の参加も募りながら、人足体験ツアーの充実を図り、また、今後の地域づくりについてともに考えるワークショップなどを企画していきたい。

③集落誌の作成

一日孫体験や人足体験ツアーを踏まえて、集落の情報を一冊で理解できる集落誌を作成したいと考えている。

集落について共通認識を図る教科書的役割、ゼミ活動のスムーズな引継ぎを助ける役割、集落の文化、慣習を保存する史料的役割の 3 つの役割が期待できる。

誌は PDF の形式で作成し、住民の方には冊子で配布する。毎年の活動を更新

することで、大学生事業の取り組みを継続的に発信していきたい。

（資料）

中　町　集　落　の　屋　号

大下(おおしも) 集落の一番下(しも)に家があった
南洋(なんよう) 戦時中南洋(サイパン)に渡り終戦後引き上げてきたため　下村の分家
車庫(しゃこ) 以前バスの車庫に使われていた所に住んでいたため
野原(のばら) 字名　　下村の分家
背戸(せど) 字名
四十刈（しじゅうかり）　中町集落の肝煎り　下村の分家
下村(したむら)
酒屋(さかや) 造り酒屋だったため
結城ホテル(ゆうきホテル) 簡易旅館だったため
大上(おおかみ) 集落の一番上(かみ)に家があるため
中村屋(なかむらや) 旅館だった
法印様(ほういんさま) 修験者だったため(羽黒山 奇光寺 真言宗)
藤次郎(とうじろう) 先祖の名前
大工様(だいくさま) 家業が大工だったため
大上(おおうえ) 集落の一番上(うえ)に有ったため
ためお
中村(なかむら) 字名
時計屋(とけいや) 家が時計屋だったため
山岸(やまぎし) 家が山の岸にあったため
丸ヨ(まるよ) 焼印が㋯の印だったため
壁屋(かべや) 家が左官だったため　　野原の分家
港屋(みなとや) 駄菓子店だったため
佐々木(ささき) 小売店だったため
こうじゃ

角(かど) 道路角に家があるため　　下村の分家
床屋(とこや) 理髪店だった為

中野屋(なかのや) 旅館だったため
お医者様(おいしゃさま) 家が医者だったため
新宅(しんたく) 新しい家だったため　⇒　越後屋(えちごや) 売り酒屋だったとき

岩橋義平さんが作成した屋号の一覧表

６．フィールドワークの感想

今年度、私が西会津町の FW で参加したのは春の人足ツアー、夏の敬老会でした。人足体験では昨年度以上の住民との交流や初参加の会津大学生と交流することが出来たのは大きかったです。昨年度の秋に空き家の掃除に携わったこともあって、来年度は改修された空き家を事業拠点として使えるかについて話し合っていきたいと考えています。

金田遼太郎

西会津町では一日孫体験という初めての活動を行いました。聞き書きでは、質問事項から話を広げていくことで地域についての思いなどを深く知ることができるのだと学びました。実際にゆっくりお話をしなければ知ることができなかった子供のころの話や今の生きがいなどの話を聞くことができ、とても貴重な機会となりました。今年度の聞き書きの内容を生かすためにも、来年度は冊子づくりなど発展させた活動を行っていきたいです。

川村美月

西会津町では人足や敬老会などを通して、全国に存在する中山間地域の現実と課題の一例を身を以て知ることができた。特に「地域活性化」という言葉の意味すら曖昧で、限界集落の再生・活性化についても「なんとかなる」としか思っていなかったが、「集落の看取り」という言葉を活動を通して知る事になり、自分の甘さを痛感させられると共に、地域を維持させていくことの困難さを改めて知った。

國分稜太

本年は実証実験として、一日孫体験を行い 3 人の住民に聞き取り調査を行いました。地域住民の皆さんは私たちに対して嫌な顔をせず、快くお話をしていただき、住民の人生や楽しみなどを聞かせてくださいました。

聞き取り調査を行っているときに感じたことは、住民の方々が大学生に非常に協力的だということです。聞き取り調査を受け入れている時点で大学生とお話をしたいという気持ちがあったのかもしれませんが、知らない人々と自宅でお話をするのは緊張し、警戒をするものです。過去に自分が行った聞き取り調

査では大学生に対して警戒しており、私としても対象者に対して質問をしにくい状況でした。しかし、中町集落の方々は楽しそうにお話しをしてくださり、私も楽しく過ごすことができました。

また、会津大学生とともに行った人足体験ツアーでは外国人の参加者と言語が違うことを気にせずにコミュニケーションを取っていました。言語の壁が感じられないほど楽しそうにお話をしており、西会津の住民は若者に対しての警戒がとても薄いのではないかと感じました。

完成されている地域に関係のない人々が来ることを拒むのは移住者が少ない地域では当然であり、中町集落もこれに当てはまると思います。ですが、中町集落の住民は若者に対する警戒や拒否が少ないことから、私は中町集落の住民は移住者を受け入れる態勢が完成していると感じました。たとえ、移住者が多い地域であっても地域住民が受け入れてくれなければ、その地域の活性化を行うことは難しいです。その受け入れを中町集落の住民はできているので、移住者が増加した場合でもその地域で共に生活をする子ができ、活性化を行うことができるでしょう。そのため、中町集落は移住者さえ増加すればそのまま活性化へとつながる、可能性を秘めた地域だと思います。

そして移住者を増加させるためには大学生の協力が不可欠です。その地域の住民では気づかない魅力を大学生が発見し、発信していく。それが大学生がしなければならない一番の活動であると考えます。発信の仕方も SNS に限定するのではなく、チラシなど人に会いながら情報を発信する方法を使用すればその場で地域の魅力を伝えることができるので有効であると思います。情報発信の方法を大学生が模索し、考えた方法で情報発信をしていければ中町集落の移住者が増加し、地域の活性化につながると思います。

五ノ井潤

西会津町では、人足ツアーや１日孫体験などを行いました。特に、１日孫体験は昨年の提案から実現した今年度始めての取り組みでした 住民の方のお宅にお邪魔し、子どもの頃のお話や今までの苦労や悩み、生きがいなどを伺いました。客観的に見てはわからないような濃いお話や体験談を聞かせていただき、有意義な時間になりました。しかし、孫体験ということでしたが、今年度は聞き取り調査しかできなかったため、来年度はそのお宅の「孫」として実際に１日お手伝いをしたり、西会津の暮らしを体験させていただけたら嬉しいで

す 。

塩田桃花

西会津町では、人足を通して多くの人と関わり合いを持つことができました。協力隊の方に若者として西会津町にどのような思いがあるのか、地元住民の方々には力仕事を協力して行うことによって絆を深め合うことができたと思います。また、今年は会津大学から外国人の学生が来て、コミュニティ形成の場になりました。人足を体験することでその大変さを、身をもって知ることができると共に、地元住民の元気の良さ、身体の丈夫さにとても驚きました。

柴山比呂

1日孫体験ということで、実際にご自宅にお邪魔させていただきお話をお伺いしました。普段の生活では知ることのできない昔の生活の様子や現在の集落に対する思いを伺うことができました。そのなかで、矢部スズイさんの「中町集落をなくしたくない」という言葉が特に印象に残りました。住民の方から直接この言葉を聞くことで、より一層重みが感じられとても印象に残りました。

鈴木美宥

西会津では、主に一日孫体験や敬老会、人足体験ツアーに力を入れ活動を行きました。一日孫体験や敬老会には実際に参加することができませんでしたが、聞き書きの内容から住民の方の素直な意見を知ることができました。人足体験ツアーについて、この時初めて人足というものを知り体験してみて、とても労力のかかるものだと実感しました。活動の中で住民の方と今後について聞き、地域を活性化させることだけではなく、自分たちが残りの余暇をどう過ごすかを考えている人もいることを知り、考え方の幅が広がりました。また、今年度から会津大学の留学生も参加し、他大学と交流する貴重な体験ができました。留学生ということで、英語しか話せない人もいるなか、日本語の勉強もしていて、両方話せる学生がいたことで、コミュニケーションをとる事ができました。もっと上手くコミュニケーションがとれれば、違う文化をもつ人達との交流により、新たな考え方や価値観を知るキッカケになり、更に活動の幅も広がると思いました。

田上輪

西会津町で行ったフィールドワークの中で一番印象に残っているのは聞き書きです。私は聞き書きという活動は初めて行いました。この機会がなければ絶対に聞くことのできないようなお話ばかりで、地元ならではの話が多いと予想していたのですが、住民の方の今までの人生や生き方、考え方なども聞くことができて本当に貴重な体験をしたなと思いました。そして、私たちのような若者がきちんと残していかなければならないと思いました。また、今回の聞き書きは先輩に任せてばかりだったため、もし次回があるならばもう少し積極的に質問などをしたいと感じました。

星幸奈

西会津での活動は、1 日孫体験と敬老会の参加でした。1 日孫体験は、奥川地区の昔のお話や地域の方の生きてきた歴史、今感じていることなど普段聞くことのできないようなお話を聞くことができ、とても良い活動だったと思います。お話をしながら、一緒にこたつに入って、お茶を飲んだり、お菓子やお漬け物などを食べたりしていて、実際に孫になったような感覚で楽しく活動することができました。今回は、聞き書きがメインのような形でしたが、農作業のお手伝いや料理のお手伝いなどもやってみたかったなと思いました。

松本麻莉菜

2019 年度　岩崎専門演習

（４年生）

板橋　実花	伊藤　千尋	今井　美月	門脇　優真
釘丸　昌美	熊田　七虹	熊田　慮有	小泉　瑛大
国分麻里奈	小林　広実	佐々木龍平	柴田　雄登
白井　綾乃	白石　　誠	鈴木　彩恵	野地　美咲
畠山　大希	菱事　奈央	遊佐善智恵	

（３年生）

及川　佑真	金田遼太郎	川村　美月	國分　俊貴
國分　稜太	五ノ井　潤	佐藤　雅哉	塩田　桃花
柴山　比呂	鈴木　美宥	田上　　輪	星　　幸奈
町田　尚輝	松本麻莉菜	吉田　啓人	渡辺　桃子

指導教員

岩崎由美子（福島大学行政政策学類教授）

２０１９年度

福島県西会津町奥川地区

奥川中町集落

フィールドワーク報告書

編　集：福島大学行政政策学類 社会計画論演習

発行日：2020 年 2 月 29 日

連絡先：〒960-1296

福島市金谷川 1 番地

福島大学 行政政策学類

岩崎由美子研究室